

『コリオレイナス』 演劇祭BITE バービカン劇場・4月公演レポート

英国演劇の重要拠点のひとつ・バービカン劇場。ここではかつて『身毒丸』『リア王』『近代能楽集』など、彩の国さいたま芸術劇場から生まれた数々の作品が上演された、縁深い場でもある。

バービカン劇場で行われる世界各国から優れた演劇を集めて行われる演劇祭BITEの10周年記念事業に『コリオレイナス』が招待された。

ローマ武将の物語に日本の侍魂を重ねて作られた蜷川演劇に、英国人達は何を見たのか……？

文=木俣 冬 (フリーライター)



劇場楽屋入り口



BITE会場となったバービカン劇場

蜷川幸雄はイギリスでも闘っていた。本番前のマスコミによるフォトコールが終わると「もう一回やってくれないか」とカメラマンが頼んだ。ローマとヴォルサイの戦闘シーンがあまりにスピーディで撮れなかったらしい。蜷川は「本番前に俳優をこれ以上動かさせないからやらない」と断った。「撮れないのは才能の問題だ」と言う毒舌も通訳されたかは不明。でも蜷川はそれらしきポーズでイメージカット(コリオレイナスとオーフィディアスの一騎打ち)を撮ることはOKした。

蜷川は今回イギリスでは異例の40人以上の俳優で舞台を作りに挑戦したが、既に英国人は、40人もの俳優達が急勾配の階段を縦横無尽に走り回ることによって圧倒されていた。

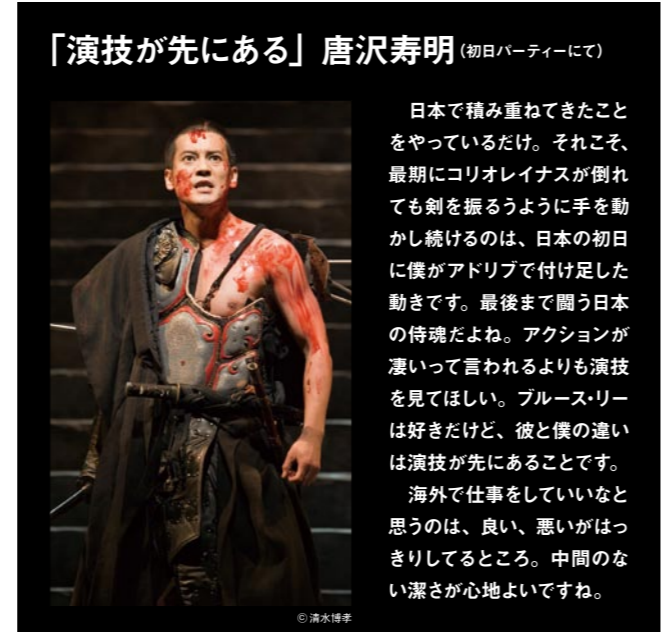
蜷川は事前に英国の新聞に、「今後英国でも英国俳優とやるのではなく日本人俳優としかやらない」と宣言していた。ギリシャ悲劇がもとになったヨーロッパ演劇は対話がベースになっているが、日本演劇は言葉よりも視覚だという蜷川の意志のひとつがこの人数だった。

日本の民衆の姿に英国の一市民が共鳴

バービカン劇場は4階まで客席でしかも中通路がないため、舞台からは観客で密集した巨大な壁のように見える。天井桟敷から舞台を見下ろすと目眩がしそうな高さだった。開演前に鑑のような防火シャッターにぼんやり映った観客の姿は既に圧巻で、扉が開くと更に装置の鏡が用意されているからより明瞭になるその物量の迫力と、舞台上の俳優40人が対峙する様はトリッキー。

英国に対峙する日本という強い意志を感じた。

専門家の意見は知らないが、ロビーで話しかけた中年男性は「日本で一番有名な演出家の舞台と聞いて初めて見に来た」と言い「俳優が階段から落ちる演出にはビックリした。俳優の懸命さに迫力を感じた」と目を輝かせていた。「蜷川さんとの信頼関係があるから階段落ちもやれる」と転げ落ちる民衆を演じる俳優はそう言う。蜷川と俳優たちの熱は市井の英国人の心を揺さぶった。



「演技が先にある」唐沢寿明(初日パーティーにて)

日本で積み重ねてきたことをやっているだけ。それぞれ、最期にコリオレイナスが倒れても剣を振るうように手を動かし続けるのは、日本の初日に僕がアドリブで付け足した動きです。最後まで闘う日本の侍魂だよ。アクションが凄って言われるよりも演技を見てほしい。フルース・リーは好きだけど、彼と僕の違いは演技が先にあることです。海外で仕事をしていいと思うのは、良い、悪いがはっきりしてるところ。中間のない潔さが心地よいですね。

©清水博幸

維新派

nostalgia

〈彼〉と旅をする20世紀三部作 #1

広がり続ける風景

群青色の夕空や劇場の青い光を背景に浮かび上がるモノクロームの街。繊細な切り絵のような、その影の間を白塗りの少年少女たちが駆け抜けていく。幾何学的な動きを繰り返しながら足踏み前進する様子はまるで、古いニュース映画で見る街のけん騒のような。ダダダ/バンバン/コンチキチ……、擬音と大阪弁を交えた台詞はやがて言葉としての意味を失い、音となり風景となって、私たちが“どこか懐かしい街”へと案内する――。

山頂でする深呼吸は、自分と周囲の自然との一体感を確かめたいという願いの表れだが、維新派の舞台を目前にした時の気分もそれに似ていると思う。深々と周囲の空気を吸い込みながら、私は台詞でも物語でもない、維新派の「風景」をこそ共有したいと願っている。

彼らの街でよく描かれるのは、鳥打ち帽や半ズボンといったモチーフに代表される少年時代への甘い哀惜の念、そして戦争や殺人など、社会生活に潜む殺伐とした狂気や不条理感。それらはどれも、いつか身に覚えのある場面として、われわれの五感の記憶を鋭く刺激する。

あそこでリヤカーを引くのは私だ。あそこで虫を追うのは私だ。やがて観客は眼前の白い少年少女に自らを託し、街を駆けめぐり。その呼吸に合わせ、郷愁の街はさらに遠くへ、広がりを増していく。想い出を呼び起こし、取り込み、さらに記憶を刺激しながら。そこにあるのは単なる空想の街ではない。流れる時の中を前へ前へと進むことしかできない私たちの日常に隠れている、もうひとつのリアルな風景だ。

文=鈴木理映子(演劇雑誌編集)

PROFILE 維新派
1970年、創作・演出家の松本雄吉を中心に、活動を開始。劇団員自らが建設した野外劇場での公演で、関西の実験演劇の担い手となる。コンセプトは「しゃべらない台詞、歌わない音楽、踊らない踊り」。精緻で壮大な装置、単語・擬音の羅列が五拍子や七拍子といったリズムに乗せて発せられる“大阪弁ケチャ”と呼ばれる発語スタイル、行進や隊列を軸にした振付で、独自の「場」の創出に取り組んでいる。『水街』(99年)、『キートン』(04年)といった地元・大阪南港の夜景を取り入れた作品群、野球グラウンドを使った『さかしま』(01年)、離島の精緻所跡で上演した『カンカラ』(02年)など、周囲の環境を取り込む“野外劇の雄”としての存在感は不動。新作『nostalgia』は、『nocturne』(03年)、『ナツノピラ』(05・06年)に続く、3作目の本格的な劇場公演。既存の劇場ならではの舞台機構や技術を生かした緻密な空間設計に期待が高まる。

●●●●● PLAY ●●●●●

維新派 『nostalgia ノスタルジア』
〈彼〉と旅をする20世紀三部作 #1

【日時】11月2日(金)～11月4日(日) 全4公演
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
【作・演出】松本雄吉 【音楽】内橋和久
【チケット(税込)】前売 一般S席5,000円 A席4,500円 メンバース席4,500円 A席4,050円
当日 一般S席5,500円 A席5,000円 メンバース席4,950円 A席4,500円
【発売日】メンバース7月21日(土) 一般7月28日(土)

Ishinha Chronicles

「キートン」2004 大阪南港
「ナツノピラ」2005 メキシコ・プラザル
2006 大阪・梅田芸術劇場

維新派公式サイト <http://www.ishinha.com/>
「nostalgia」特設ページ <http://www.ishinha.com/nostalgia/SP/>